

一葉文学における近代的自我の問題

——「にぎりえ」・「十三夜」を中心に——（その一）

木村 真佐幸

一

△明治二十七年末「文学界」に寄せた「大つごもり」から二十八年中の「軒もる月」「ゆく雲」「にぎりえ」「たけくらべ」「十三夜」などを経て二十九年の「わかれ道」「われから」「うらむらさき」などに至る約一年半に亘る一葉晩年の作品は、第二期までの作品に較べて画期的な成熟を遂げた。その視野が社会的に拡大され、写実的手法が確立したことがその主な原因である。嘗ての作品に見られた一葉の生の歎きや混乱はこれらの作品にはない。現実的欲望を放棄することによって贖はれた作家精神は、確乎とした自信、明澄な意識をもって対象を観照、把握するやうになった。V（笹淵友一「文学界」とその時代、下、昭和三十八年十一月、明治書院）といった一葉の作品変遷論、また、一葉の小説全体に関する問題で、特に社会背景に観点をおいた近藤忠義氏説、つまり「一葉が明治文学史上、虐げられた女性の為に最初の叫びを掲げた人であるにも拘らず、結局社会全体が未だ婦人解放の機運に達して居なかった為に、効果的に正しく問題を取り上げることが出来なかった。——中略——要するに此の点に関しても亦、封建的伝統観のなお相当に力強く残存する事が許されるだけの社会的根柢があったことを見なければならぬ。」（一葉の小説と国語と国文

学、昭和七年四月）といった誰にもみられるように、半ば封建的という社会的背景を素地に、一葉の作風はどのように「近代」のそれに接近し、かつ展開していったのであろうか。今、一葉文学の系譜の中、特に「にぎりえ」と「十三夜」に焦点を置き、一方、先学の示唆を求めながら作品分析を試み、一葉文学における「近代的自我」を解明してみたいと思うのである。

まず、一葉文学にあらわれた女性像とその背景および関連する諸問題について、先学の説を概括してみると、まず「たけくらべ」の少年少女の世界は、人民独立自由の気力などということをはきあいに出してくることさえ噴飯に価する（瀬沼茂樹「近代文学における人」、『文学』、国文学、第四卷第六号）、つまり、氏は「吉原を中心とする特殊な土地に成立」して、しかも「美登利は信如との淡い恋愛に活潑自在に生きていくようでありながら、実際には予定されている暗い生涯の前には極彩色のただ京人形を見るような結果をみる、そんな女性像にほかならなかった」とし、いわゆる「たけくらべ」の女性像は「近代以前の古い人間像」であり、そこには、人生の無常観や諦観が色濃く漂っているといった見方、また視点を換えてみると、「一葉文学のモチーフは「女としての訴へ」である」（島崎藤村「故樋口一葉」、『市井』、昭和五年）とのごとく、「虐待せられた女たちの生活と心情と運命とを描き、同じ運命に苦しむひとりの女として、その事実を広く、はげしく世の中に訴えた」（「樋口一葉」、『文学』、関良一、保坂弘司）とするもの、さらに関連するものとして、「類型的描写から近代写実主義的描写に変化」（塩田良平「一葉作風の展開」、『国文学』、第二卷、第十一号）したという見方、また、「樋口一葉のリアリズム」（村松定孝「近代日本文学の系譜」、『昭和三十一年十月）と、その「リアリズムを明確に打ち出しているもの、「一葉の文学はその倫理の故にすぐれているのではなく、その実感の上に立つが故にすぐれている」（久松潜一編「日本文学史」、『近代、至文堂）、あるいは、「一葉の作品は「近代的な解決が与えられたわけではないが、激しい思い切った情熱の力を以って、ひとまず女性の上に圧掛っているこの暗澹たる圧力を跳ね上げているのであり、ここに一葉の作品史における発展をみることができる」

(近藤忠義) 前記同上)、また、その作風の変遷の上から、一葉の後期の作品は、中期以前の作品に較べると、一応は写実的になって来ているが、しかし高度のものではないV (湯地孝「一葉作品の総合鑑賞」近代文学鑑賞、昭和三十三年十一月、角川書店)、と限定つきで、その写実主義接近を認めるみ方、また、観点をかえて、一恋愛を歴史や社会への抵抗としてとらえた「文学界」の近代性からみれば、それ以前かも知れないが、少なくとも観念的な傾向にのみかたよりすぎている透谷等に対すれば、一葉の方がより民衆の中に入り、封建の現実と悲惨の真相に生きたといえよう、リアルの世界に腰をすえ、リアルな手法をふまえながら、しかも浪漫的な気分を色濃くただよわしているところに一葉文学の特色があるV (高田芳夫「樋口一葉を研究する人のために」国文学、第二卷、第十一号)、と、先学の説いずれも示唆にとむものであるが、ともあれ、一葉は決して茫漠たる観念の中に遊んだのではなく、現実という荒海に、しかも息も絶え絶え生き続け、遂に精魂尽き果てて大海の藻くずと影を消したのである。つまり一人生の不如意に詠歎する抒情形態の中に真実把握の身構えを打ち出すという作品構造をもって、その胎動の中核に迫ったV (湯地孝「一葉の作品の総合鑑賞」近代文学鑑賞講座) 迫真性とその激しい内面的葛藤とはやはり高く評価されなければならないと思うのである。

二

次に、本稿のねらいの一つである「にぎりえ」に論をすすめてみたい。さて、この「にぎりえ」も、一女性としての生き甲斐のある生活を求めながら、それをそれとしてはっきり自覚し、境遇を越えていく目標をつかめず、むしろ、そういうめざめを押しつぶす、やけ酒に身をもち崩す方向においてしか描くことはできなかつたV (瀬沼茂樹「近代文学の人間像」国文学、第四卷、第六号) という慧眼を以てしたみ方、また観点をかえて、一人の世の底にうごめく女性の姿はあます処なく写され、救いのない人生の見取図を示す。あるいは、「たけくらべ」にもまして一葉の観察力とそ

れ故にこそ一しおの同情のほどを語るだろう。かくて「にぎりえ」の一篇は一葉のもっとも深刻な写実的作品としての位置を占めるし、この一篇によって写実作家としての一葉の史的位置を決定的ならしめたのである。V

(吉田精一「樋口一葉研究」
昭和三十一年十一月、新潮社)

というリアリズムを中心とした「にぎりえ」評、同じく、「リアリズム」の問題として

「にぎりえ」や、「たけくらべ」は、A巷の生活体験が土台になり、生きた人物を描くことによって、時代の現
実的傾向に沿い得た珠玉である。田山花袋が「小説作法」の中で、「この作者の作品は……写実主義とか自然主

義とかいうことには表面関連して居らぬが、しかもよく自然主義の趣に適って居る」と評しているV (高田芳夫
同上)

とリアリズム論は種々の角度から提示されている。つまり、これらの評価は、いふなれば一葉後期の文学の特色
の一つであり、かつまた、核心に触れた評言であるといえる。それでは、そのような評価の線上にでてくる「に
ぎりえ」にあらわれた女性像と近代的自我の問題についてはどうであろうか。以後これらの問題解明のため直接
作品分析に入ってみよう。

さて、「にぎりえ」の評価⁽¹⁾については、種々問題は存在するにせよ、「たけくらべ」と並んで、「特殊な環境」
の中に素材を求めながら、しかも「リアリズム」という点においては一段と前進を見せ、さながら「生きた人
間」の極限を描いた力作であったということができよう。つまり、「にぎりえ」における登場人物の、「お力―
源七―結城朝之助」は、「たけくらべ」の「美登利―信如―田中屋庄太郎(問題は残されるが……)」といった
少年少女の世界を、今度は人生の現実と、おとなの世界から真正面に、しかも四つに取組んだものといえるし、
「たけくらべ」の「美登利」対「信如」の関係における心的葛藤を、そのまま生々しく、しかも絶望かつ自棄的
反撻心をもって現実につづけたものとみることができるとはなからうか。

さて、そこで「にぎりえ」の主人公「お力」を中心とした描写を辿っていくと、まず、朋輩の「お高」を、

△年の頃二十の上を七つか十か眉毛に作り生際、白粉べったりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり▽と批判的な描写をした上で、それに引きかえて、「お力」と呼ばれるは、△中肉の背恰好すらり▽として、△洗ひ髪の大島田に新わらのさわやかさ▽、△頸もと計りの白粉も榮えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげ▽て、△煙草すばく長烟管に立膝の無作法▽さえも、人咎める人なきこそよけれ、思ひ切ったる大形の浴衣に引かけ帯は黒縹子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の処に見えて言はずと知れし此のあたりの姉さま風▽で、前記の、「お高」とは雲泥の差の描写である。さらに加えてこの「お力」は、△此家の一枚看板▽で、△年は随一若けれど客を呼ぶに妙▽があり、△氣位も高く▽しかも、△我まゝ至極▽。朋輩からも、△少し容貌の自慢かと思えば小面憎い▽と、陰口をいわれながらも、しかし、反面△交際ば存外やさしい▽処があつて、△女ながらも離れともない心持▽がする女でもある。そして、この「新開」では、△菊の井のお力を知らぬはあるまじ▽く、△菊の井のお力か、お力の菊の井か▽、さても、近來まれの拾いものとはかり、あの娘のおかげで、△新開の光が添はった▽、だから抱え主は、△神棚にささげて置いても宜い▽といった隣り近所の評判と、同朋の羨望とを一身にあつめながら、ここに最上級の形容詞に包まれて颯爽と登場する「お力」なのである。

ところで、その氣位の高い「お力」は、朋輩の「お高」に、△力ちゃんお前の事だから何かあつたからとて氣にしても居まいけど▽と一応念をおされながらも、△私は身につまされて源さんの事が思はれる▽と同情されつつ、△夫は今の身分に落ちぶれては根っから宜いお客ではないけれど思ひ合ふたからには仕方がない、年が違わが子があるがさ、ねへ左様ではないか、お内儀さんがあるといつて別れられる物かね、構ふ事はない呼出してお遣り▽と同情的なことばに対して「お力」は、△氣をつけてお呉れ、店先で言はれると人聞きが悪いではない

か、菊の井のお力は土方の手伝ひを情夫まぶに持つなどと考違へをされてもならない、夫それは昔しの夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞て源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止め止め∨と言いなながら、あたふたと立ち上がり、表を通る∧兵児帯の一むれ∨に威勢よく、∧これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたか∨と声をかけるあたり、ある種の潜在意識を偽装するポーズともみられるのではなからうか。つまり、表現型と内包する真意との相剋背度を、ここで一葉はやがて展開するであろう事件の伏線として描いたとも考えられる。それでは次に、「結城結朝之助」と「お力」、そして、「源七、お初」、さらに、「お力」と「源七」といった輻湊する人間関係と心理の交錯の中から、それぞれの問題点を取り上げてみると、まず第二章の「結城朝之助」と「お力」の合いから第三章における「お力」の述懐の場面をみていくと、「お力」は、∧頻しきりに持病が起った∨としていわくありげにふさぎ込む。そこで「源七」の来訪を告げる女のことばから、「朝之助」に、∧持病といふのは夫れか∨と切り込まれて、∧まあ其様そんな処でござんせう∨とあいまいながら告白せざるを得なくなる。つまり「源七」は、∧町内で少しは巾もあつた蒲団屋∨、それが「お力」に打ち込んで身代をつぶしてみるかげもなく貧乏して、∧八百屋の裏の小さい家にまいくつぶろの様になつて居る∨し、∧女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに来る歳ではない∨といながら、∧恨まれるは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようございます∨として、前記と同様、飛躍した論理の中にも、そこにちらと心の奥所を漂わせる。すかさず「朝之助」にその深層心理を見ぬかれ、∧御本尊を拝みたいやくしやな俳優で行つたら誰の処だ∨と衝かれ、∧みたら吃驚でございませう∨と前置しながら、∧色の黒い背の高い不動さまの名代∨と「お力」なりに卑下する。さらに、∧心意気か∨の問いには、∧此様店こんなで身上しんしやうはたくほどの人、人の好いばかり取得∨、∧面白くも可笑おかしくもない人∨ときめつけるが、「朝之助」は、これは聞き処とばかり、∧そんな人間にお前は何どうして逆上のぼせた∨と再度きりこむ。「お力」は、

△大方逆上性^{のほせしやう}なんでござんせう、貴男^{あなた}のことをも此頃は夢に見ない夜はござんせぬVと話の鋒先をはぐらかす「お力」である。しかし、一葉は「源七」のことは少なくともこの段階ではきわめて漠然としか描いていないが、やはり「朝之助」の勘どおり「お力」は、「源七」に対して「逆上^{のほ}せる」理由が存在した。否、△逆上^{のほ}せVざるを得なかったのである。それではその理由とは何か、この理由を究めることにこそ、「にぎりえ」における女性像、強いては、「近代的自我」の問題を究明する焦点が存在するのではないかと思うのである。

三

第四章になって、一方、「源七」は女房「お初」のやさしい、しかも文字通り親身の世話、さらに可憐で無邪気な一粒種の太吉の声にも反応なく、ただ△元気なくぬっと上りV、△あゝ詰らぬ夢を見たばかりにと、ちっと身にしてみても、自ら感じつつも、妻の貧しいながらも心のこもった手料理に、△心は何を思ふとなければ舌に覚えの無くて咽^{のど}の穴はれたる如く、もう止めにするVとって茶碗を置く。そんな不甲斐ないしぐさが「お初」の、△悲しそうな眼Vを誘い、△お前さん又例のが起りましたろう。夫^{それ}は菊の井の鉢肴は甘くもありましたろうけれど、今の身分で思ひ出した処で何んとなりまする先は売物買物お金さへ出来たら昔のやうに可愛がっても呉れませう。(中略)あゝ我^おれが貧乏に成ったから構ひつけて呉れぬと思へば何の事なく済ませうVだから、△夫^それより気を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私も此子^{このこ}も何うする事もならで、夫^{それ}こそ路頭に迷はねばなりません、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さえ出来るようなら、お力はおろか、小紫でも揚巻でも別荘こしらへて困うたら宜うございませうVと、ある種の条理を連ねての哀願に「源七」は、われながら未練者もめと自叱しつつ、△いや我^おれだとして其様^{そのやう}に何時までも馬鹿では居

ぬ、お力など名許りもいって呉れるな、いはれる以前もとの不出来ふでしを考へ出していよ／＼顔があげられぬ、何の此身になって今更何をおもふものか、飯がくへぬとてそれは身体からだの加減Vと少なくともことばの上では妻「お初」に柔順な態度を示し、かつ内省的であるのに、七章になって「源七」が、身もことばも「お力」への執念となつて激しく燃焼するのは一体なんによるのであろうか……。この点についての詳述は後にまかせるにしても、今、問題提起の意味で考えてみると、まず、「お力」なる人間の「外形と内実」といったものを、前記の暗示的な描写でも一部肯ずけるように「お力」の評価が、「源七的な見方」、「お初的なみ方」、そして「世間的なみ方」等々、視点観点、または角度によって種々様々な評価が生まれてくるのではなからうか。けっきょく、このような事も詮じつめれば一葉の人生観、社会観にも通じるのであって、いふなれば、冷やかでありかつ、残酷である社会の中で採まれている中に受けた現実の洗礼を通しての哀愁であり悲哀であったと理解できるのではなからうか。

それでは、「お力」の「外形と内実」といったものについて、第五章にすすんでみると、やはり「お力」も、こういう社会の人間にみられる人生上の苦悩が存在した。つまり、A菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにはあるまじ、さる子細しさいあればこそ此処に流れ落ちVたのであり、A泣くにも人目を恥れば、二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂うれき涕Vに悶え、つとめてこれを友朋輩にも洩らさじと包むA根性のしっかりした気をつよい子Vという者もあるが、実際は、A障さはれば絶ゆる蜘蛛の糸のはかない処を知る人はなかりきVと、「お力」の性格の内実を描く作者一葉でもあったのである。さて、場面は七月十六日、「菊の井」も例に洩れずの盛況、そのほかさわぎの酒席で客から、A力ちゃんは何うした心意気を聞かせないか、やった／＼と責められて、A我恋わがこひは細谷川の丸木橋わたるにや怕こわし渡らねば……Vと、うたい出したものの、何をか思い出して、Aあっ私一寸失礼し

まず、御免なさいよVと行って三味線を置いて飛び出して行く。そして一目散に家を出て、へ行かれる物なら此のまゝ唐天竺の果までも行って仕舞ひたい、あゝ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の声の聞えない、物の音のしない静かな、静かな、自分の心も何もぼうっとして物思ひのない処へ行かれるであろう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止めて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ嫌だVと極度の自己嫌悪と自棄的になって心中わめきながら、道端の立木へ夢中に寄りかかって、暫時そこに立ちどまって悶え苦しむのであるが、そんな「お力」にさらに「幻聴」となって、追い苦しめるのは、へ渡るには怕し渡らねば……Vと自分の謳う声そのまま何処ともなく響いてくるのであった。そして、その結果、到達した諦観の世界、つまり、へ仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らねばなるまい、父さんも踏みかくして落してお仕舞いなされ、祖父さんも同じ事であったといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば為る文の事はしなれば死んでも死なれぬのであろうVと、ここに渡るには怕いが、結局渡らねばならぬ「我が身の宿世」に対し、好むと好まざるとにかかわらず、「運命と対決」せざるを得なくなり、いかんともしがたい窮鼠の立場として、へ何うなりとも勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかうVと諦観と自棄を混濁させながら、へ人情しらず義利しらずか其様な事も思ふまい、思ふたとて何うなる物ぞ、此様な身で此様な業体で、此様な宿世で、何うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並みの事を考へて苦労する丈間違ひであろう、あゝ陰気らしい何だとして此様な処に立って居るのか、何しに此様な処へ出て来たのか、馬鹿らしい気違いじみた、我身ながら分らぬ、もう賑りませうVと、つまり発作的に人生の真実の琴線に触れ、思わず、我れを忘れて飛び出してみたものの、やはり、渡らねばならぬ「現実」という「丸木橋」に、ふとめざめた「自我」を、偽装の中においやつて、再び足を向けざるを得ない諦観の中を夢遊病者のよ

うに「広野の原の冬枯れ」をさまようような、自己の虚脱と放心状態に、△我れながら酷く逆上^{のほせ}て人心のないのに
覚束なく気が狂ひはせぬかと立ちどまる途端△に、△お力何処^{どこ}へ行く△と肩を打つ人がある……。けっきょく、
「お力」は以上のごとく精神の錯乱と動揺不安を抱いたまま、第六章に示されるように「結城朝之助」との出会
いと発展していくのである。

さて、以上のような「お力」の業体に対して笹淵友一氏は、「現実嫌悪に陥るのも彼女の気位と狂気とのな
す業であろう。この現実嫌悪のはげしさは浪漫人の自己解放の欲求に繋がるものである。（「放れ駒」といふ原
題はこの欲求を示唆するものである。）ただこの現実嫌悪は浪漫人のエキゾティシズムに見られるやうな憧憬的
精神と結びついてゐない。即ち唐天竺は要するに現実ならぬ世界を意味するだけで、より以上の憧憬の対象とし
ての内容をもたない。それは言ひかへれば現実からの逃避を意味するだけで、浪漫人のもつ自己拡大の要求がな
い。これはお力が叛骨と情熱とはあり余るほど持ちながら、彼女に近代的知性の照明が欠けてゐることを示唆す
る。」（「文学界」とその時代、昭和三十一年十一月 明治書院）と評しているが、ともあれ、この第五章は極めて重要な問題が託されてい
る。うに思われる。まず第一に、「お力」なる人間の裏面、あるいは真意と形容してもさしつかえないかも知れぬが、
第一章でも、△我まゝ至極△で、△気位が高く△仲間からは、△小面憎い△と陰口をたたかれる反面、△交際^{つきあい}
は存外やさしい△処があつて、△女ながらも離れともない心持△がする一面も示されていたように、自分の苦惱
を朋輩にも洩らさぬ根性のしっかりした気の強い子であるだけ、内心は仲々デリケートな処があるのであろう。
つまり、「お力」は孤独なさびしい人間なのである。「気位の強い」人間が往々にして以外に脆い反面がある。
けっきょく自己の弱さは誰よりも自分自身が認識している。それ故に、無意識の中にも、自己の中に潜むもうひ
とりの自分に対して強がりのポーズを示す。それが平素の「お力」なのかも知れない。そんな具合にしてここで

は「お力」の二面性、というより、むしろ人間「お力」の眞の姿を一瞬ながら顯示されたように思うのである。つまり、「お力」は「鬼」でも「蛇」でもなく普通の人間なのである。普通の人間なら、世間一般と異なることなく、人間誰れしもが持つ生き方があり理想がある。ところが、「お力」にそれができないのは一体なぜであろうか。「つまらぬ、くだらない、面白くない、情ない、悲しい、心苦しい」と最低の形容をもってされる悲觀的人生に、「何時まで私は止められて居られるのか」……。人生の現実、否、宿命と名のつく「丸木橋」を父ととさんも踏みかへして落ち、祖父さんも同じ事であったし、そしてわたしも同じ運命に立たされている。いうなれば、「三代伝はっての出来そこね」の布石でも示されるように、ともかくその断涯絶壁の極限から安全地帯へ避難するのには自分のみに頼らざるを得ないのか、それとも他力本願が可能なのか……。或いは不可避の運命で、あとは時間の問題か……。ここは極めて意味深長の処であると思われる。

四

以上のような精神錯乱の「お力」の前にあらわれた「結城朝之助」は、やはり身も心も投じて支えられるに充分な男であった。あたかも、兄、父の死後、孤独と一家の重圧に苦しんでいた一葉の前に現われた「半井桃水」であるかのように、 \wedge 常とは左さのみ心に留まざりし結城の風采の今宵は何んとなく尋常ならず思はれて肩巾のありて背のいかにも高き処より、落ついて物をいふ重やかなるに振り、目つき凄くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髪の毛を短かく刈りあげて頸足えりあしのくつきりとせしなど \vee と、まことに頼もしい程、今さらのように眺める「お力」であった。一方、「朝之助」も、今夜の「お力」が唯事でないのに気づき、 \wedge 聞いたら怒るか知らぬが、何か事件であったか \vee とさりげなく尋ねるが、それに対する「お力」は、大湯呑みの茶碗

酒を盛んにあおり、アルコールの力を借りて述懐するあたりは、やはり人の子なのである。ところで、その中の問題点としては、前述のように、△そも△の最初から私は貴君あなたが好きで好きで、一日お目にかかねば恋しいほどなれど奥様と言ふて下されたら何うでござんしょか、持たれるは嫌なり他処ながらは慕はしつ、一ト口言はれたら、浮気者でござんせう、あゝ此様な浮気者に誰れがしたと思召みほしめし、三代伝はつての出来そこね、親父が一生もかなしい事でござんした△とほろりとしながら、祖父、そして父、さらに自分の幼少時における貧窮の悲しい思い出を、頬に涙の痕を示しながら、△私は其様な貧乏人の娘、氣違きぢがひは親ゆづりで折ふし起るのでございませう。嚙貴君御迷惑で御座んしょ、もう話はやめます、御機嫌に障たらばゆるし下され△と涙ながらの述懐にも、「朝之助」は突然、△お前は出世を望むな△と、△嘘をいふは人に依る始めから何も見知って居るに隠すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれ△△との一言。「お力」は絶望の果て、かろうじて「結城朝之助」に心の支えを求めようとしたものの、「朝之助」は「お力」の真意を解しかね、けっきょく「玉の輿」にのる「出世を朝む女」と通俗的な解釈に陥ってしまう。一方、「お力」は、意表をつかれて、△あれ其やうなけしかけ詞はよして下され、何うで此様な身でござんするに△と打ちしおれて、△又もの言はず△の状態にならざるを得ない。つまり、絶望の中からの微かな曙光も、結果的にはさらに振幅が加って深淵につき落され、あとは自棄的な深まりを待つよりしかたなくなってしまうのである。馬場孤蝶は、「お力」の「朝之助」に対する述懐の心理について、「それは単なる出世即ち金持とか、高官とかの妻になるとか、唯物質的富裕な位置に納ることだけであったであろうか。お力は、自覚しては居無かつたかも知れぬが、さういふものだけを求めて居るのでは無かつたらうと思われる。『出世を望む』といふのは、自由を欲し、解放を求める声と解釈すべきであろう。それは小さい意味でのことであろうが、謂はゞ自由、不羈な天地への脱出が——よし無意識であっても——お力の望み求め

て居たものであったと解釈すべきであろう」（「劇になつた『濁り江』と『十三夜』」）と述べているし、また笹淵氏は「浪漫人の自由、解放への欲求をお力に見出してゐる。」（『文学界』とその時代（昭和）三十八年十一月、明治書院）と、馬場孤蝶説と符合させながらも、さらにこれに論及して、「しかしお力が自由を求めるにしても、その具体的方法が結婚によるその境涯からの脱出以外にないことは『私等が身にて望んだ処が未嚙こしが落、何の玉の興までは思ひかけませぬ』といふお力の言葉によつても明らかである。それにも拘らず、お力には結婚によつて苦海から足を洗はうとする意志がない。それは、

これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるは寧いっそ九尺二間でも極まつた良人といふに添ふて身を固めやうと考へる事もござんすけど、それが私に出来ませぬ、それかと言つて来るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛い、いとしいの、見初ましたのと出たらめのお世辞を言はねばならず、数の中には真にうけて此様なやぐざを女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添ふたら本望か、それが私には分りませぬ、そも／＼の最初から私は貴方が好きで好きで、一日お目にかゝらねば恋しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは厭なり他所ながらは慕はし、一口に言はれたら浮気者でござんしやう。

といふ述懐によつて明らかである。ここにも『感慨とすてばちと混じた』構想がある。ただこの場合はさきのやうに感慨がすてばちに変質したのではなく、文字通り感慨とすてばちとの混線といふべきであろう。尤もこのすてばちといふのは結婚によつて苦海にゐる時とは異なる意味でその自由を拘束されること——それが『持たれる』といふことの意味であろう。——を嫌ふということであり、完全な自由を求めることに外ならない。」と規定している。

ところで、その後の「源七」はどうか。「結城朝之助」の登場から逆に煽られてか、いよいよ「お力」に対する執着の焰は油を注いで燃え上つていく。さりとして、八思ひ出したとて今更何うなる物ぞ、忘れて仕舞へ、諦ら

めて仕舞へと思案は極めながらVも、昂まる感情はいかんせん、身も心もやり場のない、まさに文通り思慕輾転の体である。当然発するであろうところの「お初」のぐちや練め、果ては哀訴のことばも耳にうるさく、A辺事はなく吐息折々に太く身動きVすらしない「源七」である。ところが夕闇が迫る長屋の住居に太吉郎がいそいそ帰ってきて、なにやら大袋を両手に抱えて、A母さんこれ貰って来たVと、にっこり駆け込んでくるのを契機に「源七」、「お初」は、「お力」を意識の中心として、動的に展開するのである。

つまり、A菊の井の鬼姉さんが呉れたVという太吉郎のことばに「お初」は、Aあゝ年がゆかぬとて何たら訳の分らぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、お前の父さんを怠惰者にした鬼ではないか、お前の衣類のなくなつたのも皆あの鬼めがした仕事、喰ひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰って喰べても能いか聞くだけが情ない。汚い穢い此様な菓子、家へ置くのも腹がたつ、捨て仕舞、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めVと、罵りながら、菓子の袋をつかんで投げ出す。さて、一方「源七」は、「お力」に関しては理性の上では、A今更どうにもならぬものVであり、A詰らぬ夢Vと自嘲的であったが、太吉郎を媒体として間接的ながらも「お力」の心情に触れ、それまで抑えていた感情が、ふたたび頭角をあらわしてきた。加えて、それに油を注いだのが、「お初」の太吉郎と媒介としての「お力」攻撃の言動であろう。

それまで、吐息折々に太く身動もせず仰向した「源七」も、この「お初」の刺激剤によって動的に活動が開始された。「お初」と一声大きく、A能い加減に人を馬鹿にしろ、黙って居れば能い事にして悪口雑言は何の事だ、知人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が悪い、馬鹿野郎呼はりは太吉にかこつけて我れへの当こすり、子に向って父親の讒訴をいふ女房気質を誰れが教えた、お力が鬼なら手前は魔王、商売人のだましは知れて居れど、妻たる身の不貞腐れをいふて済むと思ふか、土方をせうが車を引かうが、亭主は亭主の権があ

る。氣に入らぬ奴は家には置かぬ、何処なりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くもない女郎めVと、どなりつけ、女房の弁解もきかず、Aさあ、貴様が行くか、我れが出よかVと、烈しくまくしたてられ、さすがの「お初」も思わぬ方向へと事態が変転していくのを、驚きかつあきれながらも、けっきょく、A口惜しく悲く情なく、口も利かれぬほど込上る涙を呑んでV、「お力」の志を捨てたことを詫びた上で、A離婚だけは堪忍して下され、改めて言ふまでも無いけれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てて来た者なれば、離縁されての行き処とてありません、何うぞ堪忍して下さい、私は憎くかろうと此子に免じて置いて下され、謝りますVと、手をついて泣き詫びる「お初」のことばに、がんとして受けぬ「源七」、あとは、A物言はず壁に向ひてお初の言葉は耳に入らぬ体Vといった具合に、一度燃え上った「お力」への情念は、水をかけれどおよそ消えることのない猪突猛進の「源七」の姿である。かかる意味では、前述の「お力」と同様、「源七」もやはり「生ける屍」といえるのではなからうか。さて、ここで一応問題になるのは「お初」の描き方である。一度は激しく妻の座から自己主張したものの、「離縁」の一言にあとは哀願に交らざるを得ない。いわば自我意識の乏しい、換言すると、運命に対してあきらめしか持ち得ない明治という半封建制のもとに生きる女の姿を代弁するが如き「お初」の態度である。作者一葉は、この「お初」の形を一方に設定しつつ、「お力」の終末へと急ぐのである。

さて、以上のように「お初」の必死の哀願すら振り切った「源七」、さらに既に述べてきた「お力」の絶望的な心境、ここに不幸にして両者相通ずる世界が横たわっているとみるのはどうであろうか。その両者の到達する場所、つまり、A魂祭過ぎて幾日、まだ盆提灯のかげ薄淋しき頃、新開の町を出し棺二つあり、一つは駕にて一つはさし担ぎにて、駕は菊の井の隠居処よりしのびやかに出でぬV、いわずと知れた「お力」、「源七」の心中

という哀れな末路の姿である。

この両者の死、つまり、「無理心中」というみ方と、「合意の情死」といういままでの解釈に対しては、関良一氏が「にごりえ考」（「文学」、昭和二九、七）においてみごとな分析を試みている。つまり、氏は四人の噂話を細かく分析整理した上で、けっきょく、「私はかねて、無理心中説にたいしては、不審をいだいていた。この破局以前、お力は、すでに自暴自棄になっており、絶望的であり、ほとんど生ける屍であったのではなからうか。とすれば、この作品は、最後に、彼女の不幸な死を暗示すれば、それで充分であったのではなからうか。お力は源七の情死をたやすくうけ入れたかも知れないし、極言すれば、お力のほうから情死を誘ったかも知れないではないか」と述べ、また、笹淵友一氏も、「文学界」とその時代、下において、「事実の確認よりもお力の運命に対する詠歎がその主題であるとすれば、無理心中であれ、合意心中であれ、心中の方法は大した意味をもたなくなるであろう。むしろそれを曖昧にしておくことによって愛欲の神秘を印象づけ、余情を深めうるとも考へられる。

恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き処より、折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ。

といふ結びの一句にはこの愛欲のにごりえから脱出しようとして脱出しえず、免れえない運命の手に捉へられたお力に対する痛恨の情が籠ってゐる。この愛欲への憐みと恐れとは『雪の日』以来一葉の意識を貫ぬいてゐたものである。この主題意識は単なる写実的態度の結果ではなく、お力の自由への憧れが空しくなったことに対する挽歌であり、更にこれを空しくした愛欲を妄執としてこれを超脱しようとする悟道の立場に繋がるものである。従ってこの主題意識は人間主義に基づく近代浪漫思想への挽歌ともいふべき性格をも持っているのである。」と述べており、両氏の説に対し、間然するところさらにはないが、しかし私はここで考えてみたいのは、前述のよう

に、「お力」は最後の支えてある「結城朝之助」にもその真意を理解されなかったという事実である。いうなれば「朝之助」によって拒絶された「お力」の真意は「出生」を望むわけでもなければ、「玉の輿」にあこがれたのでもない。つまり「純粋な人間性」の希求に喘いでいた。したがって「お力」にとっては「源七の執着力に嫌気はさしていたが憎しみはもってゐない」(久松潜一編、日本文学史、近代、至文堂) という説もさることながら、「厭いつつ棄てきれぬ真実」(黒田しのぶ、作品論「にぎりえ」
え」国文学、第二卷第十号) なのであり、「信じ頼ることの出来る誠実な男」(塚田満江「美登利とお力」
国文学、第四卷、第六号) であつたとみるのがより適當であろう。つまり、「お力」は、「何人にも語り得ない、ある烈しい苦悩に生きていた」(関良一「にぎりえ孝」
文学、昭和二年七月)、その結果、身心共に疲労困憊の極に達し、その解決の場、換言すれば、いきつく果ては「死」以外にはなかつたのではなからうか。だから、運命に対して嘆きながらも、忍従と諦念に包まれ、消極的にしか抵抗できぬ姿勢、いわば「お初」的解決法は、一葉にとっては既に過去の世界のものであり、けっきょく、真摯な態度で人生に真正面から対決した姿が「死」という極限状態へ追いやらざるを得なかつたところに「にぎりえ」の迫真性が存在するのではなからうか。ともあれ、一葉の社会批判ならびに詩人観といったものに、「近代意識の欠如」を指摘する批判は多い。しかし、明治という、半ば封建的社会背景のもと、女性といの制約を享受しながら、若くして兄を失い、父を亡くし、一家の重圧を一身に背負わざるを得なかつた一葉、そして一方にはまた、身近な「幸作」の死、さらにわが身も刻一刻と病魔にむしばまれていく。まさに、日記の字面通り、「我が身の宿世」を「そぞろに悲し」まざるを得なかつた一葉の孤独と内面的苦悩は、けっきょく「にぎりえ」という形によってぶちまけるより方法がなかつたのではあるまいか。とまれ「にぎりえ」には種々様々の評価が存在するにせよ、外形的世界はともあれ、とこまでも真実を求めてやまない作品の人間像から、かすかながらも近代的なそれを感じるのほひとりわたくしのみであらうか。

五

さて、「十三夜」は、前述の「にぎりえ」から一時を経て書かれた作品であり、一葉自身もその日記「水のうへ」（明治二九、一）に「この秋、かり初に物しつる『にぎりえ』のうわさ、世にかしましくもてはやされて、かつは汗あゆるまで評論などのかしましき事よ。『十三夜』もめずらしげにいひさわぎで、女流中ならぶ物なしなど、あやしき月旦の聞えわたる。こゝろぐるしくも有るかな。」とてれくささの中にも心の奥所にはやはり愉悦をかくし得ない。さて、この「十三夜」は、一葉の作品中における特色として、いくつかの項目を列挙することは可能であるが、まず、その第一の特色として係累の問題をあげることができる。笹淵友一氏は「文学界」とその時代の中で、一葉の作品は「すべて封建的制約を多分に受ける女性の悲劇でないものはないが、中でも、最もその印象の強いのが「十三夜」である」とし、その論拠として、「他の作品の主人公がすべて家族のない孤独者であって、家族のために一身を犠牲にする必要のない身の上であるのに反して——「大つごもり」のお峰はやや事情がちがうが——「十三夜」のお関にはわが子の外に両親や弟があつて、家族のためにその自由を拘束されること、更に奏任官の妻といふ玉の輿に乗った者として庶民社会にない特別の重荷を負はされてゐること等が原因している」を述べている。たしか笹淵氏も指摘しているように、既にふれた「にぎりえ」のお力のごとく「行かれるものなら此のまゝ唐天竺の果までも行って仕舞たい」など自己中心的な身勝手さは、少なくとも「十三夜」のお関には許されない。そこに「にぎりえ」とは異った意味での問題が「十三夜」には内包されているといえよう。つまり「家」の重圧——一葉もこれらの脱却を激しい希求として喘ぎつづけたのであるが、これはひとり一葉のみならず、近代人はひとしくこれを対処対決し、何らかの意味で心の平衡を保つため、そこに苦痛、あるいは

忍従と名のつく努力と犠牲を払わねばならぬ一つの課題ともいえるのである。

さて、そのお関には、幼馴染の録之助に対する淡い恋情を心に抱きつつも、親の指示という既定路線に従って原田の許に嫁し、過酷ともいふべき精神的肉体的屈辱に耐えながら、子供一途と心に決めつつ、その苦悩を表にあらわすこともなく、実家の親に対しても常に平静を装って、七年の歳月を過ごしてきた古風な女性である。しかし、それにもおのずと限界があった。つまり、 \wedge 千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣尽して今日といふ今日はどうしても離縁を貰おう \vee と決意させしめた理由は何んであったか。さらに、お関は \wedge よしや良人が芸者狂ひなさらうとも、 \boxplus 者して御置きなさらうとも其様な事に愠気する私でもなく、侍嬢どもから其様な噂も聞えまするけれど彼れほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうること \vee と許容し、のみならず、 \wedge うちと他所行には衣類にも気をつけて気に逆らはぬやう心がけて居る \vee ほどのお関の異常なまでの忍従……。にもかかわらず、その寛容と忍耐の緒を切ったものは何んであったろうか。まず、考えられものは、 \wedge 召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並べなされ、それはまだ \sim 辛棒も \vee しようが、 \wedge 二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑む \vee そのことと、さらに \wedge 何も表向き実家の悪るいを風聴なされて、召使ひの嬢どもに顔の見られるやうな事なさらざとも宜かりさうなもの \vee と難じている。つまり、以上の理由は、作者一葉が、萩の舎をはじめ、あらゆる場において屈辱と葛藤をつづけてきたところのものであり、しかも此の種の問題は一朝一夕で解決し得るような問題ではない。つまり、前述の \wedge 不器用不作法 \vee は第二義的なものである。努力という時間的な経過と意志によっては必らずしも解決不可能なことではないわけで、ここでは非難するための口実に過ぎないようにも思えるが、後者に関しては、明治という社会背景をとりわけ作者一葉の意識の上においては考えても、自我的意識、あるいはプライドを相当に傷つけるものであったといえるのではなからうか。けっきょく、そのこ

とを具体的に表現したのが、△一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談相手にはならぬ▽となり、さらに△太郎の乳母として置いて遣はず▽といった調子で、いうなれば、お関の人格は全く無視され、妻でなく、女性でなく、果ては一子の母としての存在すら無視されるのである。

さて、以上のように、忍従に明け暮れる奴隷的生活を断ち切り、果ては母情にすら鬼と化そうとした悲壯なお関の自我を翻意せしめたものは一体なんであったか……。ふたたび作品にじかにふれながら眺めて行くと、まず母親は、この娘の述懐を聞き、△父様は何と思し召すか知らぬが▽と暗に意見の異なることをほのめかしつつも△元来此方から貰ふて下されと願ふて遣った子ではなし、身分が悪いの学校が何うしたのと宜くも宜くも勝手な事が言はれた物▽と激しい口調で、先方から強力に懇望されたいきさつを述べ、いうなれば△お前は恋女房▽、しかも△妾手かけに出したのではなし、正当にも正当にも百まんだらの頼みよこして貰って行った嫁▽、それを△何の馬鹿々々しい親なし子でも拾って行ったやうに大層らしい、物が出来るの出来ぬと宜く其様な口が利けた物、黙って居ては際限もなく募って夫れは夫れは癖に成って仕舞ひます。第一は娵女どもの手前奥様の威光が削げて、末には御前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立するには母様を馬鹿にする気になられたら何とします、言ふだけの事は屹度言ふて、それが悪ると小言といふたら何の私にも家が有ますとて出て来るが宜かろうでは無いか、実に馬鹿々々しいとっては夫れほどの事を今日が日まで黙って居るといふ事が有ります物か、余り御前が温順し過ぎるから我儘がつられたのである、聞いた計りでも腹が立つ、もうく退けて居るには及びません、身分が何であろうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあればその様な火の中にじっとして居るには及びぬこと、なあ父様一遍勇さんに逢ふて十分油を取ったら宜う御座りましょ▽と、高姿勢で、しかも△猛って前後もかへり見▽ない激昂ぶりであるが、この母親の感情的な憤激のことは、やがて表現される父親

の冷静（母親に比べて）なことばとまさに緩急交々、かつ、感情と理性の交錯によって極めて効果的に阿関の醜意を促す結果になるのである。

六

さて、父親の齋藤主計は、その母の激情に対しても、△先刻より腕ぐみして目を閉じ▽ながら、やおらしばらくして△あゝ御袋、無茶なことを云ふてはならぬ▽と母親の感情の激昂に一本釘をさした上で、△我さへ初めて聞いて何うした物かと思案にくれる、阿関の事なれば並大底で此様な事を言ひ出さうにもなく、よく／＼愁らさに出て来たと思える▽とまず娘の立場を理解した上で、△して今夜は聳どのは不在か、何か改たまつての事件でもあつてか、いよいよ離縁するとも言はれて来たのか▽と落ついて家出直前の事情を糾す父親は、お関の感情を「動」から「静」に移行させる効果的筆致といわねばなるまい。さらに父親は這般の事情を聴取した上で、△無理もない、居愁らくもあるう。困つた中になつたものよ▽と長歎息した上で、△太郎といふ子▽もありながら△一端の怒りに百年の運を取はづして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの齋藤主計が娘に戻らば、泣くとも笑ふとも再度原田太郎が母とは呼ばるゝ事成るべきにもあらず、良人に未練は残さずとも我が子の愛の断ちがたくば、離れていよいよ物をも思ふべく、今の苦勞を恋しがる心も出づべし▽と子ゆえの母情から、暗に離婚を否定し、さらに、△斯く形よく生れたる身の不幸、不相応の縁につながれて幾らの苦勞をさする事と哀れさの増されども▽と、ここで器量よく生れたが故の「不相応の縁」と一方ではお関の自尊心を保ちつつ、片や運命的なもの説諭する父親のことばは心にくいばかりである。さらに父の「無慈悲」を詫びた上で、なおもことばをつづけて、△身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方は真から尽す気でも取りやうによつては面目しなく

見える事もあろう。勇さんだからと彼の通り物の道理を心得た、利発な人ではあり随分学者でもある。無茶苦茶にいじめ立てる訳でもあるまいが、得て世間に褒め物の敏腕家などと言はれるは極めて恐ろしい我まゝ物、外では知らぬ顔におって廻せど勤め何きの不平などまで家内へ帰って当りちらされる。的に成って随分つらい事もあろう、なれども彼れほどの良人を持つ身のつとめ、区役所がよひの腰弁当が釜の下焚きつけて呉れるのとは格が違ふ。随ってやかましくもあろう六づかしくもあろう夫を機嫌の好い様にとゝのへて行くのが妻の役、表面には見えねど世間の奥様といふ人達の何れも面目をかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何の是れが世の勤めなりVと、世間一般の道理を父親一流の論理と人生観をもって説得し、さらに娘の努力精進いかんによつては、前途に曙光を見出すことも不可能ではないといった希望観測もほめかす。のみならず、不幸はお前ひとりには非らず、世間の表面は華かに、しかもよく眼に映るが、事實は必ずしも……と、暗に人生の外形と内実の相剋に対する認識（ことばを換えるとそれは諦観に通ずるが）を促すあたりまず老獪の一語に尽きよう。加えて娘お関の翻意の焦点は、A殊に是れほど身がらの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口広い事は言へども亥えが昨今の月給に有りついたも必竟は原田さんの口入れではなからうか。七光どころが十光もして間接ながらの恩を着ぬとは言はれぬに懲らかうとも一つは親の為弟の為Vのみならず、A太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は斎藤の娘、一度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるまじVと、妻の座、あるいは女性、否、人間性そのものの不定から、母情という女の弱点をとらえて一挙に昇華させるわけであるが、さらに、出るも、もどるも何れにしても「不幸」がつきまとう「運命」であるならば、A同じ不運に泣くならば原田の妻で泣け、なあ関さうでは無いか、合点がいったら何事も胸に納めて知らぬ顔に今夜は帰って、今ま

で通りつゝしんで世を送って呉れ、お前が口に出さんとても親も察する弟も察する、涙は各自に分けて泣かうぞVと涙ながら説諭する父親に、さすがのお関も「わっと泣き」伏し、ややしばらくしてA夫れでは離縁をといふたも我まゝで御座居ました。成程太郎に別れて顔も見られぬ様にならば、此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなる物で御座んせう。ほんに私さへ死んだ気になれば三方四方波風たゝず、兎もあれ彼の子も両親の手で育てられますに、つまらぬ事を思ひ寄りまして、貴君にまで嫌な事をお聞かせ申しました。今宵かぎり関はなくなって魂一つが彼の子の身を守るのを思ひますれば良人のつらく当る位百年も辛棒出来さうな事、よく御言葉も合点が行きましたVと、悲壮な決意を示すお関であるが、ここにこの作品の悲劇が存在するわけである。つまり、お関は、ようやく体得した自我の覚醒を体现するどころか、逆に自我を完全に滅却し、葬りさる。いうなれば、わが子のために「生れ変ろう」とするのである。ただし、これは次への発展のための再生でなく、諦観の世界に「生ける屍」となって「生れ変わる」のである。そこにこそこの作品のもたらす悲劇の深刻度があるといえよう。

七

さて、第五節になって、A合点が行ったら兎も角も帰れ、主人の留守に断なしの外出、これを咎められるとも申訳の詞は有るまじ、少し時刻は遅くれたれども車ならばつひ一ト飛、話しは重ねて聞きに行かう。先づ今夜は帰って呉れVと、A事あら立てじの親の慈悲VにAお関はこれまでの身と覚悟してお父様、お母様、今夜の事はこれ限り、帰りますからは私は原田の妻なり、良人を誹るは済みませぬほどに最う何も言ひませぬ。関は立派な良人を持ったので弟の為にも好い片腕、あゝ安心なと喜んで居て下されば私は何も思ふ事は御座んせぬ。決して

決して不了間など出すやうな事はしませぬほどに夫れも案じて下さりますな、私の体は今夜をはじめ勇のものだと思ひまして、彼の人の思ふまゝに何んとなりして貰ひましょと、ここで再び、いかんともしがたい運命の前に悲しい決意のほどを両親の前で披瀝する。その娘の苦衷を察してか、せめての親心とばかり母親が人無けなしの巾着さげて出て、駿河台まで何程と車夫に問いかけるあたり、切なく、何かやりきれない「人の情」がにじみでて、このあたりみごとな筆致というほかはないであろう。

「下」にすすんでお関は「わが子」のため、「肉親」のため、文字通り「生ける屍」と決意し、泣く泣く原田と、わが子の許へ帰る複雑な心の中、突如としてあらわれた筒井筒の録之助。しかもお関は、再度原田の許へ運ぶ、その車のひき手が皮肉にも幼馴染みで淡い恋の対象である、かつての煙草屋の録之助であるとは――。お関の運命と悲劇性はより深刻度を加えて行くのである。人私は此人に思はれて、十二の年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に行々は彼の店の彼処へ座って新聞見ながら商ひするのと思ふても居たれど、量らぬ人に縁の定まり、親々の言ふ事なれば何の異存も入れられやう、烟草やの録さんにはと思へどそれはほんの子供ごゝろ、先方から口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢の様な恋なるを、思ひ切つて仕舞へ、思い切つて仕舞へ、あきらめて仕舞うと心に定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際までも涙がこぼれて忘れかねた人Vの録之助であった。一方、録之助はどうかという、人小川町の高坂とて小奇麗な煙草屋の一人息子、今は此様に色も黒く見られぬ男になつては居れども、世にある項の唐棧ぞろひの小氣の利いた前だれがけ、お世辞も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評判された利口らしい人の、さてもくの替り様、我身が嫁入りの噂聞え初めた頃から、やけ遊びの底

ぬけの騒ぎ、高坂の息子は丸で人間が変ったやうな、魔でもさしたか、崇りでもあるか、よもや只事ではないVと、ここでもお関との相思相愛をほのめかし、運命のいづらを慨歎せしめている。この幼いころから恋の対象である録之助との幼いころからの恋に対して笹淵友一氏は、「お関は今更原田と離婚して録之助と結婚する気持はなく、録之助もまた失恋の結果、性格破産者になって新しい人生を踏み出す氣力を失つてゐる。従つて彼らの出合いが情熱に点火してその運命に影響を及ぼす危険は全くない。また初恋を遂げなかつたといふ悔恨も既に時効にかかつてをり、深刻な苦悩を誘発することもない。むしろ追憶は感傷の甘さをもつて彼らの人生苦を緩和するのに役立つのである。それがこの作品における浪漫的なものの位置であり、また一葉における浪漫性の意義であつたと思はれる」(「文学界」とその時代、下、昭和三十一年十一月、明治書院)とあるが、果してそうであらうか。たしかにお関は人私が思ふほどは此人も思ふて、夫れ故の身の破滅かも知れぬ物を、我が此様な丸鬚などに、取済したる様な姿をいかばかり面にくゝ思はれるであらう。夢さらさうした樂しらしい身ではなけれどVと、現時点の複雑な心境を内包しつつ録之助をかえりみると人何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿関に向つて左のみは喜しき様子も見えないV風情である。しかし、お関にとって幼なじめ、かつての恋人に会つて情熱を燃やす心境に果してなれるかどうか。一時前までのあの激しい感情の昂ぶり、「肉親」ゆえ、「子なる母」ゆえあきらめねばならぬ文字通り「生ける屍」……。つまり「今宵限り関はなくなって魂一つがあの子を守る」ところの悲壯な決意と諦観の中に再生したお関にとっては、今さらどうしようもない人生の深淵が横つてゐるのである。一方、録之助にとつても、「親の言ふ事なれば」といえ、「玉の興」なるお関に対し、大路の柳のもと、その「十三夜」の陰翳の前に、お関の内面的葛藤や苦悩を察するすべもなく、落ちぶれた我が身にひきかえ、ただ外形のみ着飾つたお関といえども、あまりにも別世界の次元を異にした遠隔の存在とした映らなかつたのではあるまいか。それ故、作者

はお関として、久しぶりでお目にかゝって何か申したい事は沢山あるやうなれど口へ出させぬは察し下されと、切ない現在の心境をかううじてこれだけのことをばを表現するに関の山であったと思われし、また、録之助にしてみると、お別れ申すが惜しいと言っても是れが夢ならば仕方ない事……と前述の次元を異にする世界、換言するならば、やはり運命に対する「諦念」が示されていると思えるし、おしまいの部分、録之助は「東へ」、お関は「南へ」、「大路の柳月のかげに靡いて力なきさうの塗りの下駄のおと、村田の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し」と、人生における「外形と内実」の距離を暗に示し、哀愁というより哀憐の情を以って結んでいるのである。

以上、概括的ながら作品分析を試みてきたわけであるが、はじめにも記したように、「十三夜」は一葉の作品の一般的な特色である封建性の残存する明治という時代的社会背景における女性の悲劇と、さらに「身の係累」からくる主体的自我の減却がなせる苦悩の葛藤をあげることができよう。笹淵氏は「この作品が好評をえた大きな理由は明治の社会になほ多分に残っている女性の家庭悲劇を読者の同感を呼ぶまでリアルに描きえたからであり、更にそれによって不合理な家庭制度に対する問題意識を喚び覚すことができたからである」(「文学界」とその時代下、昭和三十七年十一月明治書院)と評しており、また同様に、「自覚して忍従に生きようとするところに、じつはお関の『抗議』があり、一葉の『批判』がある」(松坂俊夫「十三夜」松坂俊夫「十三夜」理想成立を中、心に。国文学第二巻、第十一号)という見方も肯定できるが、少なくとも「十三夜」におけるお関は、「奴隸的」な存在としての自己を認識し、「名のみ立派の原田勇に離縁されたからとて夢さら残りをくいとほ思わない」だけでなく、「今宵限り原田へ帰らぬ決心で出て」くる主体的自我を持つお関に対し、近代的なそれを感じるのであるが、それでは、父の説諭のもとに翻意するお関は「近代性」から一步後退ということになるのであろうか。なるほど、諦念の中に「生ける屍」と化し、忍従にさまよう表現形はそのようにも写ろうが、そこに

は先学の説の如く「不合理な家族制度に対する問題意識」の喚起があるうし、作者一葉の「抗議と批判」が切ないほど読者の哀情をゆるぶるであろう。が、それに加えて重要視したいのは、日本の封建社会が、やがて近代社会に移行する際、どうしてもぶつからねばならぬ大きな障壁——、つまり、この「家」ならびに「家族制度」の問題に対し、一葉に与えられた力量の最大限をもって真正面から取組んだこの事實は、近代日本文学の目標が、「人間いかに生くべきか」ということに思いを及ぼす時、これらの作品の中から、人生の探求と、人間の「生きる」ことへの希求も、現実という壁にぶつかってはかなく砕け消え去るその中にも、やはり「生きる」ことの真実と力強さ」を受けとらざるを得ないのである。(未完)

(あとがき)

本稿は「国語国文研究」第三六号(北大国文学会編)に掲載された小論「一葉文学にあらわれた女性像」に、テーマを改め、訂正加筆し、さらに「十三夜」論を加えたものであるが、意図した目的にはなお道遠しの感があることを遺憾に思う。なお、機会を改めてさらにその展開に労をそそぎ、責を果したい。また、本文に引用した一葉の作品は、筑摩書房の一葉全集によった。

注

- (1)(イ) 「にぎりえ、十三夜、たけくらべは代表三部作といはれてゐる」(日本文学史—近代—久松潜一編、至文堂)
- (ロ) 「たけくらべ」「わかれ道」「十三夜」「ゆく雲」「大つごもり」の五篇の小説が小説家一葉の価値を決定するのであって、他の小説は時代とともに切り棄てられるかもわからない。(和田芳恵、「樋口一葉」、昭和二十九年、新潮社)
- (ハ) (一葉が完成した小説は全部で二十一篇(中略)この作二十一篇の小説の中から「大つごもり」「にぎりえ」「十三

夜」「わかれ道」「たけくらべ」の五篇を代表作としてあげるのが現在の定説になる」（和山芳恵、「樋口一葉論」現代作家論叢書、昭和三十年）

- (2) 明治二十七年七月一日、（みずのうへ日記による。つまり「十時頃成けん、桜木丁より使来り、幸作の死去の報あり。母君驚愕、直に参らる。からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ。浅ましき終を、ちかき人にみる、我身の宿世もそゞろにかなし。」とある。

- (3) 和山芳恵「樋口一葉」、新潮社、塩田良平、「樋口一葉の研究」→中央公論社にそれぞれ評しい。
また、蒲生芳郎「一葉日記試論」、（文芸研究）、にも学ぶべき説がある。（一九六七、一〇）

（本学助教授）

—Résumé—

The Modern Self-consciousness in the Literature of Ichiyo Higuchi
— Centering around *Nigorie* (*A Muddy Estuary*) and *Jusanya* (*The Thirteenth Night*) —

by

Masayuki KIMURA

It has been pointed out that there is a lack of “consciousness of modernity” in Ichiyo Higuchi’s social criticism and view on poets as well as in her personality displayed in her literature. “It is true,” says Mr. Tadayoshi Kondo, “that Ichiyo was the first woman to lift up her voice in behalf of the ‘oppressed’ woman... but she cannot be said to have handled the problem from the most effective and proper angle.” This seems to be partly because hers is a literature with the feudalistic and immature Japan of the Meiji era for a background and partly because of her own classical attainments. Then, is it impossible to find out her “consciousness of modernity” in her literature? The writer does not think so. As most scholars point out, there are clearly seen three stages in the development of her literature. But, what about the problem of her “modern self-consciousness”? The writer has tried to consider her approach to modernity by analyzing her two novels *Nigorie* and *Jusanya*.